

八木健に学ぶ滑稽俳句 14

高橋 素子

メル友のなかなか寝ない夜長かな 八木健

機会があり、柳美里さんの「自殺の国」（河出書房新社）を読んだ。ごく有り触れた高一の女学生が、「死」に魅せられ、ブログで募った仲間三人と自殺を決行する過程と、揺れ動くその心理を綴った最新の小説である。集団心中は最期の最後で、死を弄ぶ様な彼女の身勝手さによって、幸い未遂に終わったが・・・性別・年齢を偽り、互いに履歴・環境を隠して、ブログで集まった人々が、「死」というただ一点の共通項のもとに、それら全てを無視して心を許し、共に死ねる事に驚かされた。

作者も中学時代、何度も自殺未遂を繰り返したという。年間の自殺者数がこの14年間連続で、三万人を超えているという異常事態では、これはもう物語ではなく、現実なのだ。

掲出の師の句には、思わず笑ってしまった。深夜とは言え、メールを一方的に止めることは義理を欠くことであり、もうメル友と認めてくれないかも知れないと思うと、子供でなくても恐ろしい。その心理を師・八木健は上手く滑稽句に詠んでいる。

今回も古今の名句と、師・八木健の句の比較により、滑稽句の学習を深めて行きたい。

思ふ事只一筋に乙鳥（ツバメ）かな 夏目漱石

飛ぶつばめ地に条痕をつけにけり 八木健

掲出の漱石の句「思ふ事只一筋に」は、勢いよく直線を引くような燕の飛び方の譬えで、言葉遊びに富んだ句である。また、燕の飛び方に、人の生き方を重ね合わせているとも読める。

師・八木健の句は、燕が地面すれすれに飛ぶ姿を見て、地面に筋を付けたと感じて「つけにけり」と、非科学的に断定している。「俳句は理屈ではなく、感じた心情を大切に断定して詠む、世界で一番短い詩です」とは、師匠の言葉である。

夕燕我には翌（アス）のあてはなき 小林一茶

千枚田数へるために燕来る 八木健

一茶の句は「夕闇迫る軒下を、餌を待つ子燕のために忙しく飛び回っている親燕。それに比べて、自分は家族もなく、明日のあてもないその日暮らしの明け暮れなのだ」との意で、物心ともに最も苦悩に満ちた江戸貧困生活時代の句である。

師・八木健の句は、千枚田をくまなく、すれすれに飛ぶ燕。それは、燕が棚田の数を数えるためにやって来ているのだと断定して、滑稽句の佳句となっている。

つばめつばめ泥が好きなる燕かな 細見綾子

産婦人科医院に生まれ燕の子

八木健

泥や糞で汚されるので、燕の巣は嫌われがちだ。しかし、細見綾子は、そんな燕がしきりに泥を運んで巣作りに励む様子に温かいまなざしを向け、無邪気に句に詠み、名句となった。

人間の妊産婦が通う産婦人科医院にちゃっかり巣作りした燕。やがて、人間同様、医師たちの御蔭で、無事子燕の誕生。万一、子供たちが病気になったとしても、ここは病院だから安心だ・・燕がそんな計算をしたはずはないが、掲出の師・八木健の句からは、いろいろ想像出来て本当に楽しい。「注意して観察すると、身の回りにはこんなに面白い俳句の題材がいっぱいです。何かしらの発見があるはずですよ」と、師匠の声が聞こえて来るようだ。

雲雀より空にやすらふ峠かな

松尾芭蕉

少年のゆびに撃たるる揚雲雀

八木健

雲雀は鳴きながら垂直に舞い上がり、しばらく囀った後、一直線に落下する習性があるが、芭蕉は峠で安らいでいるのだろうか、雲雀の声がはるか下の方から聞こえて来る。雲雀より上空にいることを、「上に」とせず、「空に」と詠み、高さを強調して名句となっている。

師・八木健の句は、空高く舞い上がり、美しい声で鳴いている雲雀を、少年が指をピストルの形にして撃つ真似をしている。「雲雀の声を愛でる」のではなく、季語を裏切った意外性に新鮮な発見があり、滑稽句の佳句と

なっている。

落つるなり天に向つて揚雲雀

夏目漱石

落ちさうになれば吊り上げられ雲雀

八木健

漱石は、小説「草枕」の中で「雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全体が鳴くのだ」と名言を述べている。魂の活動が鳴き声になってあらわれたものである。漱石は、空に昇り空にとどまって囀る雲雀を、ただ空にとどまるのではなく、「天に落ちる」と詠んで名句となった。

師匠からは「滑稽句には、知性が最大の敵である。写生して作ることは、世間一般の俳句と同じであるが、見たままを断定して詠む。しかもそれは、科学的であってはならず、読者が納得する表現でなければならないのです」と、教えられている。掲出の師の句は、この手本のような滑稽句である。確かに雲雀は見えない糸に吊り上げられ、落ちずに飛べるに違いないと、思えて来るから不思議である。